

戦後間もなく広島に生を受けた私の原体験は、比治山の南麓にあった六畳と四畳半の二間を中心とする手づくりのわが家とともにある。麓を東に行くところよつとした荒れ野があつて、そこには子どもの冒険心をくすぐる池や湿地があつた。秋になるとススキやコスモスが風になびき、水辺の生き物は琥珀色の陽光を浴びながら喜々として水と戯れた。その周りにはバツタや赤トンボが秋の風に揺られながら、飛んでいた。

広島島の街の中心部では奇跡的な復興が進む一方、比治山とその麓にはまたこのような荒れ野が存在し、自然が持つ治癒力によって息を吹き返すさまを目の当たりにすることができた。それは七十年間草木も育たないと言われた広島島の奇跡の象徴であつたに違いない。

経営コンサルタント

岡村 有人



おかわら・くにと 1947年広島市生まれ。2003年音響機器メーカー・ボーズの副社長を退職後、独立。東京都世田谷区。

今を読む

心重視する価値創造を

「豊かさ」と「閉塞感」

中で心穏やかに過ごした平凡な日常に思いをはせる時、豊かでありながら閉塞感にさいなまれる今日のことが疎ましく思われる。

社会のリスクを浮き彫りに有の文化を尊重しながら社順守だ。会基盤を共有するという現もう一つは個人レベルの精神に働きかける新たな価値観の創造である。確かに科学技術は一日以内に世界中どこへでもわれわれを運べるほど進歩したが、これが究極の幸福ではあり得ない。真の幸せは精神に宿り、真の満足は心の中にはぐくまれる。それが「豊かさ」と「閉塞感」の板ばさみというパラドックスへの答えなのではあるまいか。

アメリカのサブプライムローン問題に端を発する金融危機は百年に一度の危機と言われているが、限りない欲望を前提とする経済モデルを追い続ける限り、歴史のモニユメントから見たヨロツパの歴史が国境線を引く戦いでつづられた一面であつたことがうかがえる。民族の団結が国家存在の大義となり、それに

わが家の土地は自給自足の野菜栽培と養鶏に供されやがては破滅へと突き進んでいた。今思うと、戦後の十年間は人間が人間らしく勇氣と希望を持って生きてきた時代であつた。蟹気楼のごとく現れ消えていった比治山とその麓の原風景、その

危険は日常茶飯事となり、やがては破滅へと突き進んでいった。グローバール経済に組み込まれた金融商品が複雑に絡み合い、修復には当初予想されたよりはるかに多くの努力と時間が必要である。実に見事に現代この挫折を克服し、民族固

宗教、科学、哲学、文学、芸術などが絡み合うことによつて個性ある文化の集合体としてのヨロツパ文化を開花させていった。

しかし、この過剰な民族意識が、第一次、第二次世界大戦の主たる火種となつたことは歴史が示す通りである。ヨロツパの人々が産業活動、経済活動において利益を超越したグローバールな法的ルール作りとその

がてこの自由という言葉に翻弄される。限らない自由の追求は限らない欲望へと姿を変え、今日の経済破たんに至つた。

このような現状からわれわれが取り組むべき二つの変革を実現することに對する期待感、とりあえず世界中で膨らんでいるとみて